（様式２）

令和５年度・令和６年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

鎌ケ谷市立五本松小学校

研究主題　「自分の思いや考えを表現できる児童の育成」～書く取組をとおして～

研究仮説　「ひろげ・深める」場を充実させることで友だちとの対話から、考えや表現の仕方をよりよくしようとする姿が見られ、自分の思いや考えを豊かに表現できる児童が育つであろう。

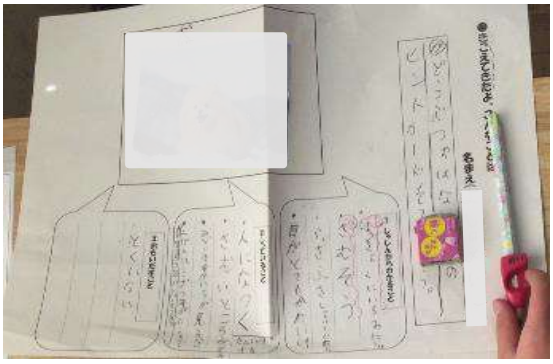
１　学校の概要

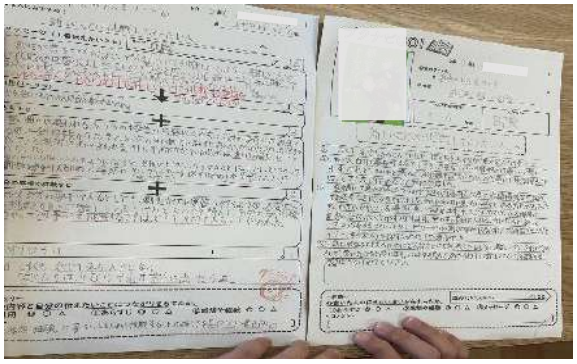
本校は、昭和５３年に開校した、鎌ケ谷市で最も新しい学校である。今年度で創立４７年目を迎える。学級数は、２２学級（特別支援学級４学級を含む）、全校児童数は５４０名である。（令和７年１月２０日現在）「かしこく　やさしく　たくましい　子どもの育成」の学校教育目標のもと、よりよい心身の成長ができるよう「あ・そ・べ(あいさつ・そうじ・べんきょう)」に重点をおいて指導を行っている。

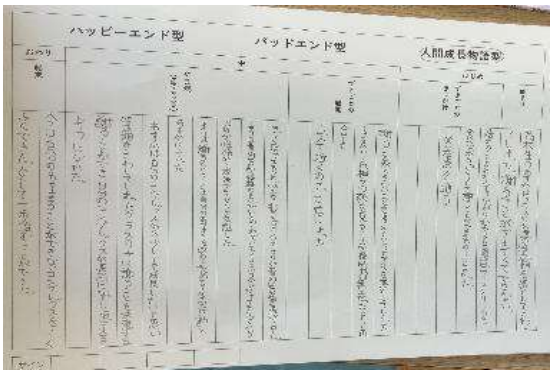
２　研究の概要

（１）　児童生徒の実態と課題

本校は、令和３年度より国語科「書くこと」に焦点を当て、自分の思いや考えを文章に表現できる児童の育成を目指し、研究をすすめてきた。今年度は４年目にあたる。令和５年度実施の全国学力・学習状況調査の本校の正答率は、全国平均正答率よりも高い結果であった。しかし、「情報の取り扱いに関する事項」や「書くこと」、「記述式」の問題では、全国や県の正答率と同等か下回る結果となった。「原因と結果など情報と情報との関係」について理解できていないことがわかった。また、「記述式」では、条件と字数の制限を設けた作文の取組を行うなど、あきらめずに最後まで取り組める児童を育成するための授業改善や工夫が必要であると考えるに至った。校内児童アンケートの結果を分析すると、令和５年１２月と令和６年５月に実施した児童の学習アンケートでは、国語の「書くこと」の学習をとおして、生活や他教科に役立っていると感じている児童がいる一方、未だ実感できていない児童も一定数いる。そのため、学習することで多様な分野に役立っていると児童が実感できるよう指導すると同時に、教職員も学習指導をとおして指導のやりがいを感じることができれば相乗的に効果が表れるのではと考え、研究を進めることとした。







参考資料
『ひろがる言葉　小学国語』教育出版
１学年「きこえてきたよ、こんなことば」
5学年「書評を書いて話し合おう」
6学年「物語を作ろう」
・構成メモを作成し、考えが整理しやすいよう工夫した例。

（2） 学力向上のための取組

〇毎週木曜日の朝学習の時間で書く活動の学習（短作文・語彙力）に全校で取り組む。

〇加配教員の導入による書く力を向上するための有効的な活用方法を確立する。

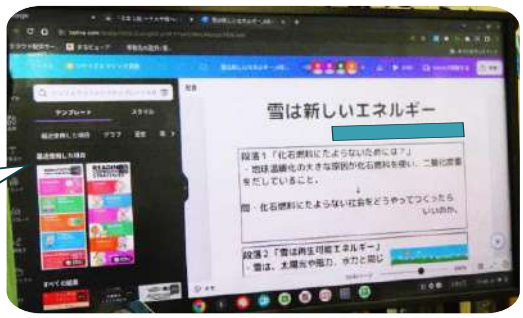
〇自分の言葉で考えをまとめる活動を国語以外の教科にも取り入れる。

〇学習の到達点が児童にわかる工夫された学習計画と実践モデルプログラムを活用する。

「広げ・深める」場を充実させる授業改善

今年度の授業実践例　６学年
「雪は新しいエネルギー」

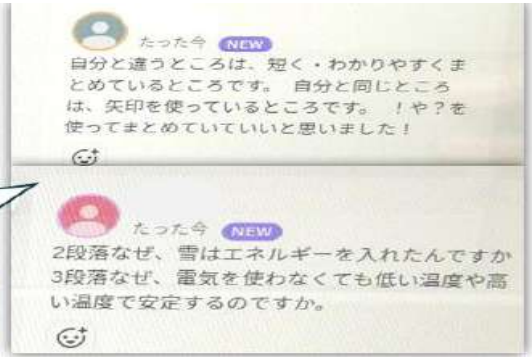
オンラインアプリを活用して、
複数の情報をまとめて書く活動



「情報と情報との関係」や「情報の整理」に関する資質・能力が向上

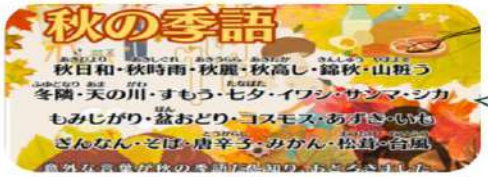
今年度の授業実践例　６学年
「雪は新しいエネルギー」

端末上での
「広げ・深める」場の設定



問いをもったり、自分や他者のよさに気付いたりする力が向上

日常的な取組による表現力の向上



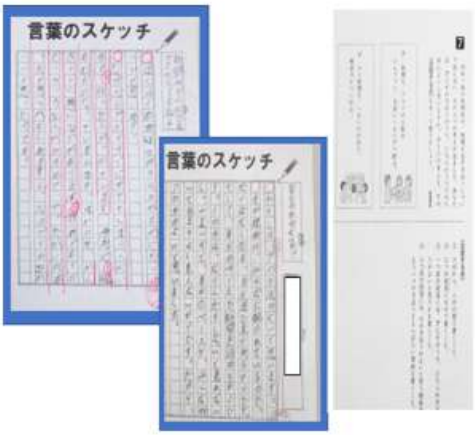
全学年対象「語彙の掲示物」

学校行事や季節等に応じた
語彙や知識を各学年の掲示板に

全学年対象「話合いの掲示物」

考えを広げ・深める活動に
役立つ合言葉を掲示

言葉による見方・考え方を
働かせるきっかけにつながる



「標準学力調査」の問題に
再度取り組んだ事例（４年生）

〇本番で書くことの正答率が低かった
→「書けないのか？」
「書く時間が無かったのか？」

じっくり取り組めば書くことができる
→書く力を生かせる授業づくりを

（３） 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

○学力差が開いていたため、加配教員・学習サポーターの導入により個別支援や習熟度別の学習形態をとったことで手厚い学習指導・支援ができた。

○発表方法について、担任と２人で実演したり、プレゼンテーションを作成し、話し方を録画したりした。

○すべての学年に学期ごとに配置されたため、本校の国語の学力向上に有効な取組になった。

児童が安心して作文や資料探しに取り組める活用方法を確立

３　研究の成果

○学習目標を達成するための計画表や教師見本があることで、児童がゴールを見据え、見通しをもって授業に参加するができた。

○単元の最初に相手・目的を明確にすることで見通しをもつだけでなく児童の意欲が継続する学習となった。

○国語辞典、漢字辞典、類語辞典を授業で活用したことで語彙力が高まり、様々な文章表現が国語以外の教科でもできるようになった。

○児童アンケートから「いろいろな言葉を生活の中で使えるようになった」と感じる割合が向上した（年度当初から＋11.4%）。

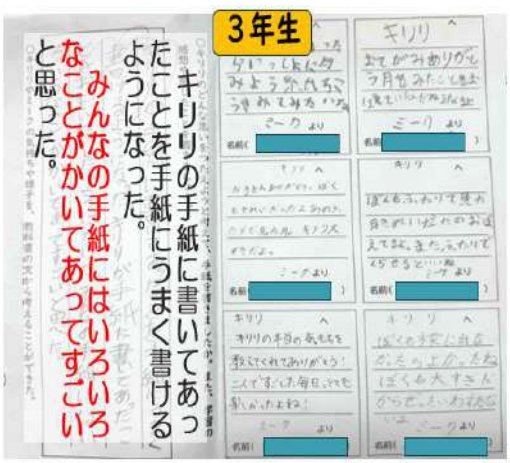
○ICT を授業に取り入れることで児童が自分の考えや気持ちを表現できる選択肢の幅が広がった。

◆目的意識と相手意識をもたせる学習活動

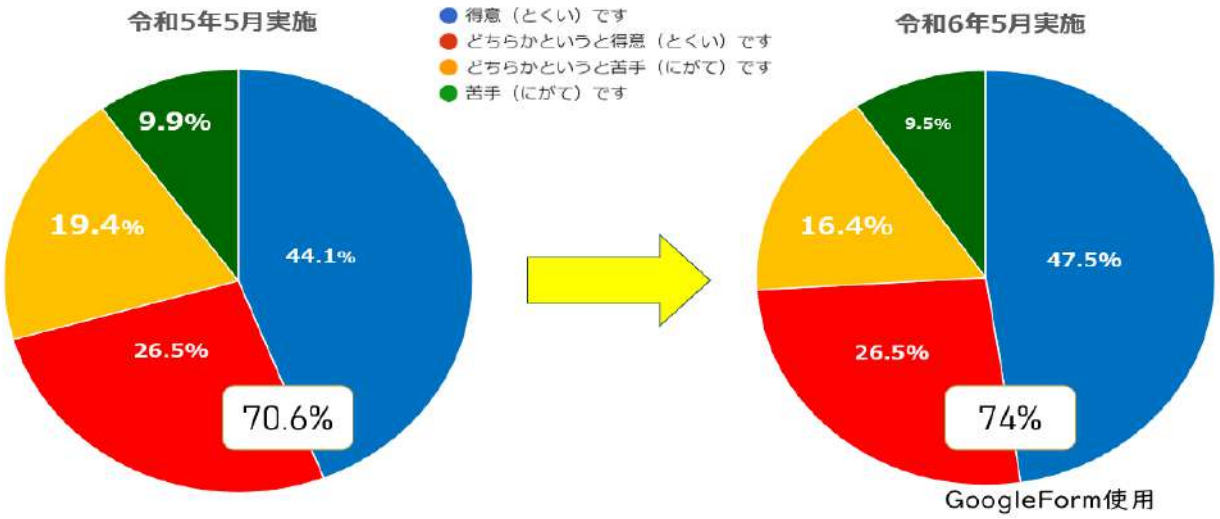
ゴールを明確にした学習活動を行ったことで、
目的意識と相手意識をもち、豊かに表現することができた

◆考えを広げ・深める活動　振り返りから

互いのよいところを見付け合う共有活動を行うことで、
自分の考えや書いた文章をよりよくしようとする意欲が向上した



児童アンケートから 「自分の考えを文に書くことは、得意ですか？」

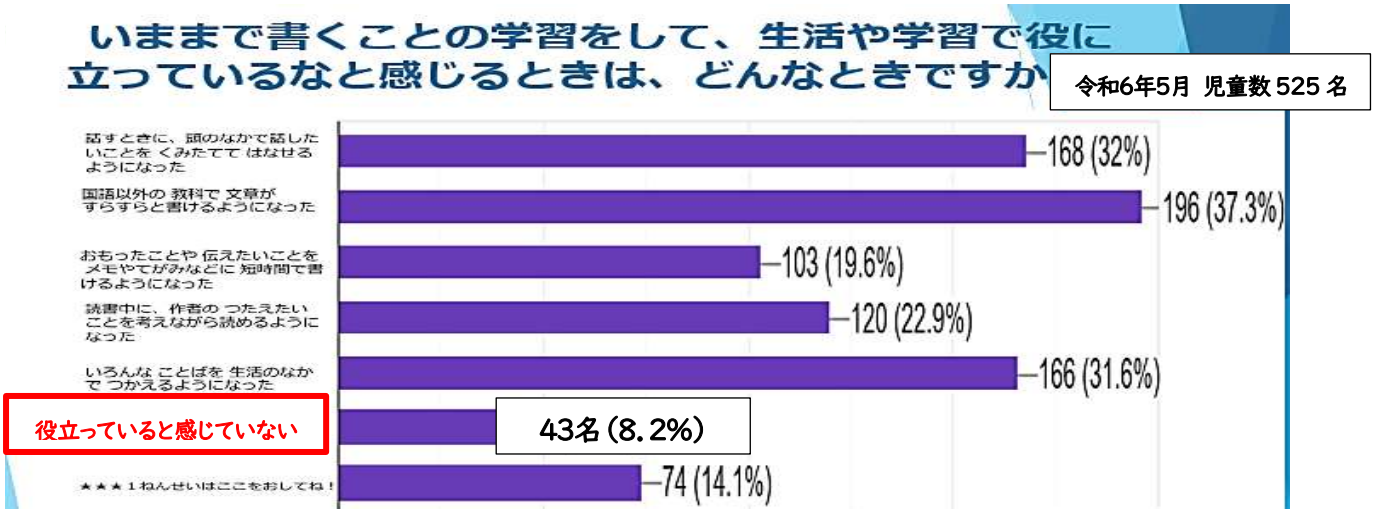


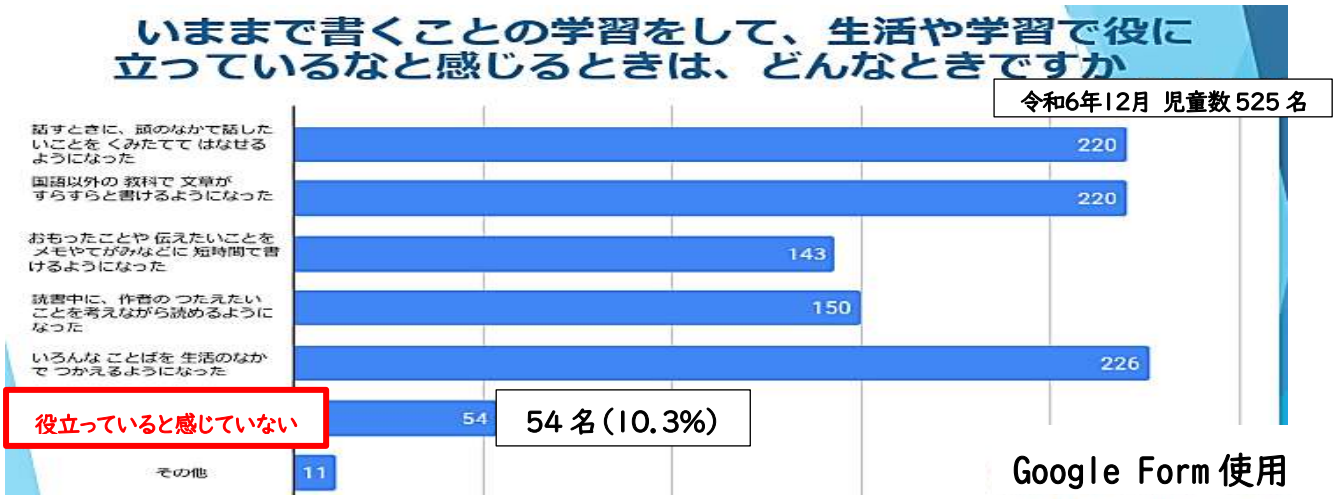
４　今後の課題

年２回実施した児童アンケートで、「いままで書くことの学習をして、生活や学習で役に立っているなと感じるときは、どんなときですか。」の質問に５２５名中５４名の児童が「役立っていると感じていない」と回答していた（令和６年１２月の２回目）。これは、令和６年５月のアンケートよりも人数が増えてしまっている。

このことから、習得した能力を他教科で生かすような学習活動を今後も取り入れ、「書くこと」だけでなく、「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域にも書く活動で培った能力を生かしていきたい。

また、他教科の書く活動が短時間で円滑に行われるよう、引き続き考えが伝わる文章が書けるよう全職員で指導していきたい。




いままで書くことの学習をして、生活や学習で役に立っているなと感じるときは、どんなときですか
令和6年12月 児童数525名
話すときに、頭のなかで話したいことを くみたてて はなせるようになった
220
国語以外の 教科で 文章が すらすらと書けるようになった
220
おもったことや 伝えたいことを メモやてがみなどに 短時間で書けるようになった
143
読書中に、作者の つたえたいことを考えながら読めるようになった
150
いろんな ことばを 生活のなかで つかえるようになった
226
役立っていると感じていない
54
54名(10.3%)
その他
11
Google Form使用